書評

福井県郷土史教育研究会編

ぼくらの福井県

松原信之

現在、各中学校において着々と移行実施されている新しい中学校学習指導要領の改訂の特色の一つに、「身近な地域」

学習の強化があげられる。従来、日本の歴史教育や地理教育が多分に中央に主眼が置かれ、地方が軽視されていたものを、まず身近な地域の学習理解を通して社会科学習をおし進めようというもので、小学校から高等学校までの指導要領改訂の一貫した新しい傾向であろう。

しかしながら、このような現場教育の要請に応えることのできる先生方のための教材として何があるのであろうか。また生徒が自主的に調査しようとした場合便利な参考文献としてはどんなものがあるのであろうか。福井県史や各市町村史などは歴史が中心である上、語句なども難解で、生徒にはなかなか利用に不便である。このような中で浮び上がってくるのが本書である。

本書は次の九つの章に分かれる。

Ⅰ福井県の位置と風土
Ⅱ福井県の歴史
Ⅲ福井県の政治
Ⅳ福井県の産業と経済
Ⅴ社会と生活
Ⅵ郷土の文化のあゆみ
Ⅶ郷土の宗教
Ⅷ福井県の年中行事
Ⅸこれからの福井県

各章はさらにいくつかの節に分かれる。たとえば、

Ⅱ福井県の歴史
一、ひらけゆく越前と若狭
二、国府の成立と寺院・貴族の栄え
三、武士の勢力と朝倉氏の興亡
四、大名の支配と民衆の成長
五、明治維新と近代化のあゆみ

Ⅸこれからの福井県
一、日本海時代を迎えて
二、新しい郷土づくり
三、これからの産業
四、幸せな社会づくり
五、次代をになう人づくり

付録として、「福井県の主な方言・福井県の主な民謡」を収録している。

本書は　ポプラ社の県別シリーズの福井県版であるから、全体の構成を踏襲して書かれていることは当然だが、これらの章や節のタイトルからもわかるように、単に郷土歴史・郷土地理のみならず、民俗文化・社会経済、さらには福井県の政治に至るまで、わかりやすい文章と明解な論説で叙述され、漢字にはルビまで付されている。また写真や地図や表が方々に掲載されてあることも本書の特色の一つで、読んでいても非常に楽しい。

執筆に当たった先生方は、本県有数の歴史研究家、大野高校長三上一夫先生をはじめ、いずれも各教育現場で社会科教育に熟達されたベテランの先生方ばかりである。テキストがない郷土教育を創意工夫で以って切り抜けてこられたその苦労の結集が本書の所々ににじみ出ているように思える。

以上、教育現場を対象に本書を招介してきたが、現在は歴史ブームの時代といわれ、地域社会の歴史地理に対する関心の高まりの中で、本書はこれら一般大衆の要望にも応えられるものであることを付記して置きたい。

（ポプラ社　二一三ページ　一、二〇〇

118

円)